

家族史の中の祖父が見つけた終の棲家

— 引揚者として上海から浜松へ —

杉 野 俊 子

The Last Home our Grandfather Found

— from Shanghai to Hamamatsu as a repatriate —

SUGINO Toshiko

はじめに

筆者の祖父である鈴木無絃^{むげん}こと鈴木画一郎^{かくいちろう}は、「孫たちよ！海外へ雄飛せよ」という遺言を残して1957年に他界した。画一郎（1878-1957）は1913年頃に個人的動機で遙か彼方のアメリカまで海を渡り、日本人排斥運動が激しくなる中、一時帰国中に『驚き入つる母国の社会』を執筆¹し、47歳で再度アメリカに渡った²。工学院大学研究論叢第49-2では、エリート留学生も一般の日本人移民も、日米の移民政策と人種差別の影響を受けたという事実を、日系アメリカ人の総体像と合せて浮き彫りにしてみた。研究論叢第53-1号では、1930-45年の上海の日本人租界と引揚げに至るまでの時代背景に焦点をあて、鈴木画一郎の著書とその息子（筆者の父）の鈴木健の著作³を基に、当時日本・上海で育った夫婦とアメリカ帰りの祖父との上海での暮らしぶりを、当時の世界情勢を鑑みて描いてみた⁴。

本論では、1. 上海の日本人租界の生活から引揚げまで、2. 引揚事業と引揚者、3. 引揚者の戦後の生活、4. 鈴木一家の浜松での戦後の生活について述べていきたい。第二次世界大戦後すでに70年経つ。島村⁵も述べているように、引揚げをめぐる学術研究はすでに定着しているように見られるが、エリート層ではない「引揚げ者たちの戦後の暮らし」をオーラルヒストリーとして残す課題はまだ残っている。また、戦前の日本における人の移動の範囲は、国家の活動範囲と強く結びついていた。いわゆる「外地」を含む海外に移動した人の8割以上が旧植民地ないし中国に在留していたという統計があるように⁶、戦後70年経つすでに風化しつつある第二次世界大戦前・中・後に起きた日本やアメリカ政府の施策、戦争、敗戦など個人の力ではどうしようもなかった事実がある。そしてそれによって何百万という人々が自分達の生き方を変えなければいけなかった。今回、祖父画一郎の人生を振り返るこ

とは、彼個人の生き方として捉えるだけでなく、そこに個人の枠を超えた国家の存在というものが大きく影響していたという点に注目したい。そしてそのような視点で過去の事例を考えることで将来の若者に参考になる点があれば幸いである。

1. 上海事変から引揚まで

(1) 画一郎、日本からアメリカへ、アメリカから上海へ

画一郎は、1878年（明治11）に現在の磐田郡竜洋町に生を受け、田舎の地主のむすことして海岸や河口の農地を自然の友とした幼少期を過ごした。その画一郎が特にアメリカに憧れを持つようになったのは、幼少時に「日本で日本人と外国人が入り混じって生活する夢」をみて、つくづく英語の勉強の必要性を感じ、英語の勉強を独学で始めたことにある。現代でこそ、英語を勉強することは当たり前になっているが、当時このように考えることは稀なことであったはずだ。画一郎は東京法学校（現法政大学）で学んだ後、27歳の時に扇章汽船会社に入社し、欧米や南北アメリカの諸港を訪れて見聞を広めた。欧州大戦の最中に、学閥や財閥と縁がないため昇進がままならぬ扇章汽船会社を辞め、1人息子の健^{けん}を長兄宅に預けて、1913年（大正2年）に37歳で移民としてアメリカに渡った。

当時、西海岸には約6万人弱の日本人移民がいたが、すでにカリフォルニア州では実質的に日系人が土地を所有することを禁止する「外国人土地法」が成立しており、米国国籍を取得した二世の子どもも名義で土地を所有しなければならない時代だった。遂には、1924年の排日移民法と呼ばれる移民法で「市民となる資格の外国人」の入国が禁止された⁷。

画一郎も、土地にからむ問題があったようで、1921年（大正10）43歳の時に一時帰国した。当時、アメリカへの移民は船賃や旅券申請費など高額だったので、激しい遺産争いの末に何とか金策に成功した画一郎は、再々度アメリカ西海岸に渡った。47歳の時だった。その後の10年間、画一郎はアメリカ西海岸にいたわけだが、邦字新聞の寄稿文や、ハリウッ드의日本人名優「早川雪舟」との集合写真や、キリスト教上三村時代を築いた松村介石との接点などの断片的な情報以外は、非常に情報が乏しい。

母幸子は、鎌倉出身で大正初期に上海に渡り日中商業通信社を経営していた父親の長女として1917年（大正6）6月に上海北四川路にて誕生し、1924年（大正13）に上海第一北部小学校に入学した。上海内乱と第一次上海事変の際は鎌倉の小学校と女学校に編入した。事変が収束すると再び上海に戻り、日本高等女学校を卒業し父健との結婚に至った。

父の鈴木健は1912年（明治45）に静岡県に生まれ、1932年（昭和7）浜松師範学校を卒業後、翌年10月に上海中部日本尋常小学校（以下中部小）に奉職した。上海に渡ったのは、渡航資金を集める際の画一郎の激しい性格を目の当たりにして、これ以上養父母（画一郎の長兄夫婦）に迷惑をかけたくないと思ったようだ。上海の中部小では、3年1組を担当し、委員は図書委員、専門教科は黒帯を活かして柔道を担当した。1935（昭和10）年、健が23

歳の時に、既に 57 歳になっていた画一郎を上海の日本人租界に呼び寄せた。

(2) 共同租界と日本人居留民

租界とは、現在の中華人民共和国（当時の清国）内の外国人居留地のことをさす。日本租界は日清戦争（1894-95）勝利後から終戦（1945）まで続いた。最も早い時期に設立されたイギリス租界がフランスやドイツなどをぬいて貿易や経済の面で一番繁栄していた⁸。しばしば「モザイク都市」と称される上海は、圧倒的多数の中国人のなかで、各欧米諸国の人々と日本人は混在しながらも混ざり合うことなく、イギリス人とアメリカ人ですら別の共同体を形成していて、それぞれが独自に排他的な社会を構成していた⁹。

近代期の上海が長く日本人の心を捕えて離さない理由は、まず近接性にある。近いがゆえに、上海は多くの日本人庶民にとって往来が可能な土地であり、そこにはエリートしか許されなかった「洋行」の堅苦しさはなかった。また、地理的な近さは、気候や文化面での近接性を高め、上海をますます日本人に身近なものにした。しかし、さらに大きな理由は、上海が中国都市でありながら西洋文化の展示場であり、西洋文化への憧れとともに、西洋文化と中国文化が混ざり合って生まれた上海のクリオール文化がもつ包容力に日本人は惹きつけられたからだ。日本が近代社会の規範をますます高めていくにつれて、その規範に縛られない自由さや独創性にあった上海は、日本人にとって決して夢幻でないもっとも身近で現実的なユートピアだったのである¹⁰。

それゆえ、陳は、日本人の心の内では、上海はアジア大陸における「ヨーロッパ」であったと述べている¹¹。「バンド」「ガーデンプリッジ¹²」「スコッツロ（スコット路）¹³」等は当時近代化していた上海の代表的建造物と場所の名称であった¹⁴。日本人居留民は経済活動が活発化すると共に増加し、1936 年（昭和 11）の統計では、2 万 3,672 人のうち、商業が 7,729 人、公務・自由業が 1,495 人となった¹⁵。呉淞路（習慣的に虹口と同義語）が日本人の商業街とするならば、北四川は日本人居留民の高級生活住宅と公園、神社、学校、病院、書店などがある文化的な憩いの場だった¹⁶。その中で特筆すべきは内山完造氏が経営していた内山書店で、文豪の魯迅（^{ろじん}）を初め上海に来訪した日本の文化人と中国の左翼文化人との交流の場ともなっていた¹⁷。

北四川路は日本人学校の集中地になり、上海で最初の北部日本人小学校（上海尋常高等小学校）の他に、上海第一・第二日本国民大学校（後者は東部日本小学校）など 10 校もあった。高等女学校では「ハイカラ」な洋風の教育を行うなど、生活や教育面では恵まれた環境だったが、政局面は不安定な要素が多かった。例えば、1925 年 5 月に上海で学生デモによる大きな排外暴動事件が勃発し、2 年後には、蒋介石率いる北伐軍が北京の軍閥政府を打倒するため上海に近づいてきたので、共同租界に住んでいた外国人約 3 万人はパニック状態になった¹⁸。その後、排日運動は激化し 1932 年（昭和 7）1 月 18 日、第一次上海事変がおきた。多数の国民党軍が日本人共同租界に迫ってきたため、日本は鎮圧に陸軍の投入を決定した¹⁹。

(3) 日本人租界の鈴木家の生活

健は、画一郎を呼び寄せた翌年の1936年（昭11）に前田幸子と結婚した。健24歳、幸子19歳の時である。死処を求めて上海に渡った父親健は、上海の不順な気候でも健康面で不安がない現地生まれの日本人女性を妻に選んだ。自宅は当時としては大変瀟洒な3階建の2戸建て、現在の二世帯住宅に当たるものだった。ここで、親子とは言え、画一郎と健は初めて一緒に生活をするようになった。しかし、同じ日本人でも三者三様の家庭環境で育ったため価値観が多に異なっていた。画一郎は、西洋的で進歩的であると自負する一方、孔子など中国の古い学問や漢詩などに趣味を持ち封建的であるという複雑な思想の持ち主であった。母幸子は日本人家庭の日本租界で育ったとはいえ、上海の学校で先進的な教育を受けていたので、女性は控え目だという感覚は少なかった。一方、父健は日本国内の厳格な役人の家庭で育ったので、礼儀を重んじ我慢を強いられる生活をしてきた。画一郎は、若夫婦の言動が気に入らないことが多く、しばしば暴力を使って意を通したようだ。

健が上海に渡り、画一郎を呼び、幸子と結婚をする頃は、日本は国際連盟の正式脱退やワシントン海軍条約の破棄等苦難の連続であったが、上海においては1931年（昭和6）第一次上海事変と1937年の第二次上海事変の間で比較的平和であった。しかし、1936年（昭和12年）の年明け以来、日本人狙撃事件が頻繁におき、翌年7月には、盧溝橋^{ろこうきょう}付近で日本と中国が衝突し、日本側から見た支那事変、現代では日中戦争と呼ばれる戦乱のきっかけが起きた。上海に残った画一郎は、8月15日、中部小学校に避難をし、身重の幸子を長崎の病院に預けて1人で戻ってきた健と19日に再会、以後9月半ばまで1ヶ月余2人は中部小で避難生活を送った。日本側は、計陸軍5個師団を上海に投入して中国軍は3師団（約7万人）に立ち向かい、同年11月9日に上海全域を完全に占領したものの、日本側は3ヶ月で約4万人の死傷者を出したと言われている程の激戦だった。

上海が平穏になった昭和13年に、母幸子は第一子の達徳^{たつのり}を連れて上海にもどってきた。子供はその後昭和14年に善勝、16年に絹恵、18年に南海雄、20年に文徳と生まれた。画一郎は、一緒のベッドで毎晩寝るほど長男を可愛がっていたので、若夫婦との確執の原因となった。当時6歳だった長兄によると Mr. ゴードンという英国人と貿易をしていたようで、アメリカ暮らしが長かった画一郎には、イギリス的な洋風の生活は快適だったようだ²⁰。

(4) 引揚時の上海と鈴木一家

父健は戦況が悪くなった上海の状況を以下のように書き残している²¹。

戦争の影は深く濃くなっていった。租界を走っていた名物の二階バスは、日本軍が接収すると共に影を潜めた。図体の大きいこのバスを運転するためのガソリンは無くなっていった。中略。インフレは日毎に激化し、一万円投げ出しても乞食がそっぽを向くようになった。こんな状態でも一旗組は軍に便乗してじゃんじゃん儲け、飲めや歌えやと荒れ狂っていた。前線では到るところ死闘が続いていた。（中略）満州、朝鮮方面に安全地

帯を求めて疎開する者が多くなった。私も妻子の安全を計り、疎開を勧めてみたが、家内は承知しなかった。生死を共にしてこそ親子だと言い張って聞かないのである。やむをえず万一の時を考慮し、青酸カリとピストルまで用意して、敗戦に脅えながら上海に留まったが、それが返って幸せとなった。もし家族の疎開を実行していたなら、恐らく再会は難しかったと今でも慄然たる思いにさせられる。家内の断固とした常識が結局家族の幸福を護ってくれたのである。

ついに、1945年8月15日に日本は終戦を迎える。アメリカ主導の上海会議を経て日本人送還計画は実行されることになるが、国民政府は終戦直後から独自に日本人の処遇に対処していた。同年9月30日には「中国境内日僑集中管理法」を發布して、まずは中国にいる日本人を集中的に管理することを決定した²²。この法律に基づき、国民政府は、中国各地の大都市に「集中営」と呼ばれる日本人収容所を設置し、日本人を集めて管理した。もっとも早い時期に日本人管理が始まった上海では、45年10月1日に「上海日僑管理处」を設立して日本人管理体制を開始している²³。鈴木一家が住んでいた西至北四川路（現在の四川北路）は第一区として、10,429戸数中7,023戸（79,086人中57,636人）が対象となった。父健はその様子を以下のように書いている²⁴。

私達は敗戦を迎え、前途の不安に多少の動揺を覚えたが、生活が昨日と一変したわけではなし、陸戦隊が相変わらず治安維持に当たっていて中国人の妄動もなく、敗戦の実感が身に迫って湧いて来なかった。中略。憲兵を含めた中国の先遣部隊^{せんけん}が現れるに従って、日本人の取り扱いがだんだん厳しくなった。抑留地域が決められ、日僑と明示した腕章をつけてその地域の中だけで生活しなくてはならなくなった。私達は危険を感じ、必要のない限り外出しないようにしていた。帰国の日を待ってひっそりと暮らしている日本人の抑留生活を真新しい自転車に乗った憲兵が颯爽と巡回していた²⁵。

終戦後抑留生活の不安の中で、四男が産まれたため、この赤ん坊と家族の安全を第一に考えた父健は、出来るだけ早く帰国しようと決意した。その一週間後に鈴木家の隣保は幸いに帰国できるようになった。一家は、1946年（昭和21）4月に、父（当時34歳）・母（29歳）・祖父（67歳）と5人の子ども（8歳、6歳、4歳、2歳、5か月）の総勢8名で、上海から祖父方の実家がある浜松市に引き揚げてきた。

2. 引揚事業と引揚者

（1）引揚者はどのような人を指すか

引揚者は、1945年8月15日の日本敗戦によって、それまで居住していた「外地」（台湾、朝鮮、満州、関東州、サハリン（南樺太）、千島列島、南洋諸島などをさす戦前の用語）から日本本国（戦前までは「内地」と呼ばれていた）へ帰還した人々を指すと言われている²⁶。厚生省で「外地（樺太を含む）及び外国在留邦人引揚者応救護措置要綱」が決定され、政府

は一時宿泊施設・食糧・医療等の国庫負担、引揚証明書、縁故地への無賃乗車証発行などの事務的業務を担当したものの、この段階での生活援護への具体的関与はなかったので、戦災援護会がそれを引き受けたとある²⁷。

終戦直後は、「民間邦人」の帰国は「引揚げ」、「将兵」の社会復帰は「復員」と呼ばれて区別されていたが、1948年（昭和23）に邦人の帰還に関する業務担当が厚生省の外局である引揚援護庁に統一されると、両者とも「引揚げ業務」と総称されるようになった²⁸。

復員と引揚者の総数は、終戦時点の統計が複数あるために正確な数字はわからないが、およそ320万人以上だと言われている²⁹。

(2) 中国、日本、アメリカの引揚げ対策

佐藤³⁰は、「引揚げは、歴史上日本人の国内問題として捉えられる傾向にあり、戦後の混乱の中で数百万人の日本人引揚げがなぜ可能になったのかは十分に明らかにされておらず、また、1945年8月15日以降、中国大陸に取り残された280万人もの日本人をどのように処遇するかは、中国国民党と中国共産党による国共内戦においても、「反日」「抗日」を国是とする新しい国家建設においても重要な懸念事項だった」と述べている³¹。

当初日本政府は、少なくとも1945年8月-9月にかけての基本方針は「できる限り現地に定着」であった。これは日本が大陸に進出以降設置してきた工場や施設、農地といった「財産」を保護するため、日本政府は日本が築いてきた財産を引き続き保持して、日本の技術力・経済力を通じて戦後中国社会に影響力をもつことを主眼として、日本政府は決定がなされる最後の段階まで受け入れに自発的に行動しなかった。また、中国国民政府も、日本政府に呼応して、日本の「遺産」を活用することを望んでいた³²。

一方、戦前・戦中と上海や広州に海軍を駐屯していたアメリカは、当時から国民党を軍事的・政治的に支援していて、残留日本人の「早期送還」を求めていた。引揚げを早めた理由として、旧満州ではソ連や共産党による強制的な撤収が頻発していたことがある。国民政府やアメリカにとって、共産党と対峙する、あるいはソ連に対峙することは無視できないことであったので、敵性財産の接収は中国全土で展開した³³。たとえば、上海の接収状況は、金融業、運輸通信業、貿易収買業など、1945年当時で18億3000万米ドルに相当し、これは華中、華東、華南における日本の資産総額の90%を占めていた³⁴。その件に関して、父健も次のように記している。

終戦になり抑留地域に拘束された私達は、保甲制度による自治組織によって、自分達の身を処するようになされた。統合機関として日僑自治会が組織され、委員が公選された。

内村完造さんも選ばれてその運営に当たったが、邦人の引揚げについては勿論、日本人の文化的遺留品の保存には、中国の文化人と衝突して多に意を用いたようであった。アメリカ政府の意向を受けて、1945年10月以降は日本も中国も日本人残留原則から引揚げ方針に転換していったことから、日本人引揚げにはアメリカ本国に主導権があったことがわかる。

(3) 日本の引き揚げ作業側

引き揚げ作業は、当時の日本の人口の一割弱に相当する人々が一挙に帰還してきたわけなので、尋常ではないことだった³⁵。その大変な状況を舞鶴地方引揚援護局史が以下のように表している。

こんな日がやがて来るなど、誰も予測する者としてなく、予め用意した引揚げの手配をして待っているなどという事は全くなく、突如として発生した予見不可能な非常事態として、関係機関は押し寄せてくる膨大な人数の対処に迫られた。今引揚げられても本土も荒廃しその上、大変な食糧難である。大量に引揚げてきても生活の保障はできない、そこに当分はいてくれ、引き揚げるといふ考えかたもあった。同じく、浮島丸の爆沈(20.8.24)の直後であるが、その時期にも多くの朝鮮人たちが同じ舞鶴港から、延べ9隻に分乗して故国へ引揚げていった。その帰路、釜山から引揚者を運んで来た。引揚者は上陸後24時間以内に援護局を出発、帰郷させねばならぬ指令であったから、業務は急速処理を必要とし、引揚者も職員も不眠不休であった。そして一般に援護金物資の給付はなく、軍隊は舞鶴重砲兵連隊に収容して給食、復員に関する事務を行い、邦人は埠頭において炊き出し給食を行いつつ、埠頭広場において帰国業務を処理し、終了した者は帰郷先別に臨時列車により西舞鶴駅から送出した³⁶。

しかも、何とか日本に引揚引揚げた軍人や民間人の皆が国内の元の住所に帰れたわけではなかった。

3. 引揚者の戦後の生活

軍人・軍属は、ポツダム宣言第9条に基づき「復員」が進んで行く中、約320万人の一般邦人の帰国における国際的な法的根拠はなかったが、前述のように、戦災援護会が生活援護への具体的関与を引き受けてくれたお蔭でそれが可能になった³⁷。

いずれにしろ、帰国時には、所持金は1人につき千円以内で、貴金属・文書・写真の持ち帰りは禁止されていて、手荷物も制限された。上海の場合は1人30キロの荷物を持ってきた。それ以上のものを持って帰ると生命に危険が及ぶという噂が流れたため、母幸子は所有していた貴重品をすべて中国人のメイドにあげてきたそうだ。それまでの財産は凍結ということになった。この大量の人を受け止める時に条件は、まさにこれらの人々が何も持っていなかったというところから始まった³⁸。そのように、持たざる存在であった引揚者も、何とかして日本で生活を始めて生き延びなければならなかった。

(1) 浜松までの引揚げ

一家は、1946年(昭和21)4月に、父(当時34歳)・母(29歳)・祖父(71歳)と5人の子ども(8歳、6歳、4歳、2歳、5か月)の8人で、祖父方の実家がある浜松市に引き揚

げてきた。終戦時の浜松は、飛行場と軍需工場があった関係でアメリカ軍の艦砲射撃で一面焼け野原状態だった。引揚船の中は、幼い子どもを抱えた者には過酷で不安感を増すものだった³⁹。その様子が父健の著から読み取れる。

みんな揃ったところで隊毎に船室に入るようになった。この船はアメリカの輸送船だから、指定された船室を甲板から覗き込むと、広い穴蔵に入っていく感じだった。急な昇降階段を危なげに下りて割り当てられた場所についた。鉄板の上にむしろを敷き手荷物で周囲をかこんで、どうにか体を伸ばせるくらいの座敷をつくった。これが当分の我が家である。(略)。船窓もないだっ広い部屋は、電灯が所々ぼんやりと灯っているだけで、向こうの方ははっきりみることも困難だった。その中に随分たくさんの人を詰めたみて、もう人いきでむっとする程だったが、天井が高いだけがそれでも救いになっていた。(略)。昨夜から一睡もせず働き続けた私は、もやもやした疲れの中に、5人の幼子を無事連れ出した安堵感でいつの間にかうつらうつらと眠ってしまった。(略)。翌日の午後、日本の島々が見え始めた。真っ青な海に点綴する島々、黒ずんだ岩壁に松の緑が美しく映えていた。私達の心は弾んだ。日本をはじめてみる子ども達は、見馴れぬ風光に驚きをもって眺めていた。(略) 船は博多に入って行った。検疫がはじまり、コレラの恐れが出て二日間沖合で仮泊することになった。懐かしい日本を眼の前にして上陸できないのは残念だったが、無事日本に着けた喜びで船内は明るく弾んでいた。

このように、一家は何とか博多港に無事到着し、所定の手続きを済ませた後に、博多から広島、浜松までの引揚列車に乗り込んだ。

博多からの引揚列車は、真夜中に浜松に到着した。「さあ、目をあけて、しっかりしなさい。」混み合う列車から引き抜くように全員を降ろし、ほんと立ちあがったプラットホームは真っ暗で、4月の冷えた夜気は身を震わせた。重いリュックをそれぞれに背負い、人気のないホームに手をつなぎあって駅頭に出た。夜目にははっきりしないが、茫漠たる暗さの中に破壊の後をつつんで町はつめたく荒れていた。奉仕に出ていた4、5名の青年たちに導かれ、その夜は駅前のバラックに泊まった。子ども達はすぐに寝込んで安らかな寝息が洩れ、瞼ははりついているのに、心は一層冴えて容易に眠ることはできない。脳髓の中にじんとした悲哀がしみこんでくる。

車内で甘いものを入れた荷物をとられてしまったが、鈴木家の5人の子どもにとっては、初めての日本であり、長兄にとっては憧れの日本に無事についたことになる。

(2) 引揚者の困難

大多数の引揚者は、貧しさの中で引揚げ後の生活を営むのに必死だった。引揚対策でまず問題となったのが住居の不足である。京都の場合、1948年の時点で引揚者約7万人、27,000世帯のうち、約4,000世帯が住宅あるいは収容施設を必要とする状況だった。当時の行政が収容施設の運用によって対応できたのは、このうちわずか3割程度。多くの人々が引揚者と

して住環境という生活のインフラの整わない厳しい状況におかれていた⁴⁰。稲葉（2013）も、こうした同援の事業の中でも、身一つで帰国した引揚者にとっては、定住地と生業の確保がもっとも重要な問題であったと述べている。それに拍車をかけるように、引揚者に対して、周囲の地域社会から差別的な言動が見受けられた。一例として、「縁故のある引揚者でも、頼った身内に冷たくあしらわれ、生活相談所で間借生活からの脱却を相談する引揚者は後を絶たなかった。多くの人口を抱える大都市はいずれも空襲を受け、戦災者にあふれて、戦災者と引揚者が入り混じるなか、戦争による被害を免れた地方の元兵舎や工場、社員寮などに多くの引揚げ者が収容されることになった」などがある⁴¹。また、はじめの頃の入居者は、敗戦前には海外でかなりの地位についていた人が多かったために県庁関係やその他の官公庁に従前のポストよりずっと下がったポストにも我慢して就職したものが多かった⁴²。

1959年に引揚者を対象としてインタビュー調査の中でも、「お前たちは外地で散々贅沢な生活をしてきたのだから、少々苦しい目をみても、あたりまえだ」という理由で、援助や支援を断れたことが、戦後の生活において最も大変だったと引揚げ者が述べている⁴³。

これが敗戦直後の実態で、1960年代後半まで「引揚者」という社会集団の困窮状態は完全に解消されることはなかった⁴⁴。

4. 鈴木一家の浜松での戦後の生活

(1) 定住のための両親の奮闘

父健も雨露をしのぐ家と仕事を探すのに奔走していた。当初は本家に居候をしていたが、しばらくして病院の跡地に引っ越した。この土地は馬込町の真ん中の十字路にあった。建物は米軍の艦砲射撃で壊されコンクリートの門柱と東の塀がかりうじて残されていた。

一時、画一郎の兄の家に寄寓していたが、ここも戦災に遇い、焼け跡にバラックが建っているに過ぎなかった。その一部屋を年取った母が使用していたのに、私達が引揚げて来ると聞いて空けてくれた。その四畳半に家族は重なり合って寝起きしていた。仕事を始めるにしても、住居を求めることが先決となった。次の日から手当たり次第に知人を頼って東奔西走した。毎日朝早くから日暮れまで歩き回ったが、結果はむなしかった。20日くらいたった時、復興住宅を手に入れることができた。2千5百円にプレミアがついて5千5百円を支払った。狭いながらも雨露を凌ぐ我が家を得て心は休まったが、手元には5百円を余すのみとなった。誠に心細い状態だったが意にもかからなかった。捨て身の太々しさが心を占めて、返って爽快だった。

この家は、当初我が家で全敷地を使用でき、バラックだが桃の木もある庭つきで一家にとってはまずまずの広さだった。その後、敷地の半分に使用が限定され、後ろの離れに画一郎が住むようになった。この家は、ある時期から母幸子の母の前田ハツも住んでいたが、著者が生まれる一年前の昭和23年に亡くなっている。

定住地は手に入れたものの、今度は生計を立てていくのが大変だった。父健は、「引揚直後、恩師に身の振り方を相談したら、教職に戻れという。月給が7,800円とのことだった。8人の家族を抱え、文字通り裸一貫で帰った身には、土地や財産があるわけではないから、その月給では家族の露命をつなぐことはできない。」と述懐している。しばらくは、慣れない商売に手を出して、生活が軌道に乗るまで悪戦苦闘したようだ。

懸念した通り日本の食生活は悲惨だった。それは単に赤ん坊だけでなく、食べ盛りの子ども達に耐えられないものだった。上海を出発する日まで、不足のない食事をしていた子ども達は、日本に着いて一変した食事内容に戸惑い、直ぐには適応できなかった。食べなれぬ玄米や粉食に、下痢が続き痩せこけていった。その上、水が合わないのか、でき物がやたらとでき、その始末に手を焼いた。

結局、父健は順調に行っていた商売も、所詮「武士の商法」で、商売仲間に騙されてしまい元の本阿弥になってしまった。幸いにも1953年（昭和28）に浜松市役所に入って地方公務員になり、母幸子は小さな洋品店（馬込洋品店）を営んで家計を助けていた。昔患ったジフテリアの後遺症などで母親の体調が悪い時は、二男や三男や長女が母親の仕入れや家事を手伝っていた。家族は自然とお互いに助け合うことを学んでいた。

最悪の状況で最善に賄うことが、その頃の家内の大きな仕事であった。食べ盛りの子ども達にせめて腹八分には食べさせ、栄養失調にさせない努力が続いた。特に、引揚げ4年目に誕生した二女（筆者）は、小さく痩せた赤ん坊だった。乳の出もすっかり駄目になっていたので、もらい乳に歩き山羊の乳など探し求めたりした。馴れない日本の生活だけに、この苦労は一層大きな負担だったろうに、家内は見事にやりとげた。この頃の馬込町は戦争の後遺症からようやく復興をとげつつある頃で、アスファルトの街中は小型トラックなどが走りだし、そして何より子ども達であふれ返っていた。

(2) 浜松おける画一郎

筆者が2歳くらいの時に、祖父画一郎におんぶされてすぐ上の兄と一緒に馬込川の方に歩いていったというのが、祖父についての最初の記憶である。祖父は筆者のすぐ上の兄が幼稚園に行くのを送っていたので、よく送り迎えをしていたようだ。その頃の祖父はすでに70歳を超えていたので、エキセントリックで暴力的な姿はみじんもなかった。筆者が幼少の頃、「飛行機に乗ってサンフランシスコ公園に行こう」と毎日のように画一郎の洋行のお供をさせられた。ところ着いた先は決まって近くの小学校に隣接する野口公園だったので、その度にがっかりしたが、当時もう使用されていなかった50銭を使ってお菓子を買ってくれ、恥ずかしかったがうれしかったという思い出がある。

画一郎は長男と二男に、特に英語や国語など熱心に教えていたようだが、長男はさぼって逃げてしまうことが多く、二男はまじめに高校生位まで教えてもらっていたようだ。最近のことだが、二男が小学校二年生の時から、祖父が言う通りに書いていた日記が見つかった。

その中から、上海とアメリカについて書いてあるくだりを紹介する（原文ママ）。

- ・ 1947年4月14日（マンデー）今日は朝から雲もなくあたたかく、ちょうど上海のようでした。お父さまの話では、上海から浜松へ来たのは去年の今日で、ちょうど一年になるのだと言いました。
- ・ 4月16日水曜日（ウェンズデー）ワシントンでは、12・13のボトマック川のさくらの下でさくらまつりがおこなわれました。日本からおくられたもので、これを見に50万からの人が集まりました。（先生のコメント：日本が（戦争に）勝っていたらよかったですね。でもさくらはアメリカに行ってきたきれいにさいっているんですね）
- ・ 4月29日火曜日（チューズデー）、今日は天長せつのさいじつで、しずかないい天気でした。ぼくはいつものように、朝学校へ行き、しきをすまして、おひる前に家へかへってきました。上海にぼくらがいた時には日本人は大ぜい新公えんにあつまり高く日の丸のはたをあげ、君が代をうたって、東の方をむいておがみました。それからしまいにみんな大きなこえで万歳をやってから、げんきになり家へかえりました。
- ・ 5月25日日曜日（サンデー）雨や休みの日には、しんだいがあるとよく休むことができますから、それをほしいです（ベッドの絵が描いてある）

この絵日記は、祖父が二男に書かせたもので、二男の言葉というより祖父の言葉と解釈ができる。そこから分ることは、祖父は上海とアメリカの生活を懐かしがっていたことだ。また、浜松では西洋風の生活をする事が出来ず、畳に布団を敷いて寝ていたので、ベッドが大変懐かしかったようだ。

画一郎は、白髪で目が青く見え、外套を着て山高帽をかぶっていたので、幼い頃の筆者には外国人のように見えた。英語に関する記憶といえば、画一郎が寒さしのぎに英字新聞をよく壁に貼っていた程度である。しかも、日頃孫たちには優しくかったけれど怒った時に英語で怒鳴られたので、逆に英語に対して恐れをいだいていくくらいである。それ以外は、近所のこども達と毎日のように離れの祖父の部屋で、学校ごっこやお芝居や踊りを踊って遊んでいた。そんなとき、画一郎は、地球儀を横に置きながら、ぼろぼろのロッキングチェアに座って、英々辞典や英字新聞を天眼鏡で読んでいたものだった。

鈴木家の子ども達もやがて日本社会に慣れていった。その様子を父健は、「日本の社会が立ち直るにつれ、こども達の世界も明るくなった。よく食べ、よく遊び、遠慮なしに大きくなっていった。上海のように伝染病の心配もなく、その上、どの子も運動神経がよく、いずれ劣らず活躍するので、ますます逞しくなっていた。」と記している。

そんな中、1957年（昭和32年）に祖父の画一郎が亡くなった。79歳だった。奇しくもアメリカの独立記念日の7月4日である。あれほど父健と母幸子に迷惑をかけた画一郎であるが、病気で寝込むことなく一日で亡くなったのは、当時8歳から19歳だったのに現在では高齢化が進んでいる画一郎の6人の孫たちにとっては理想的と言えるものである。

おわりに

このように、画一郎を筆頭に上海の日本人租界から浜松へ引揚げてきた鈴木一家ではあるが、一家は満州や樺太などの引揚者のように暴力的で非人道的な扱いを受けたわけではない。耐え難い飢えも銃撃戦も経験しているわけではない。二男曰く「上海では戦争があるのかなあというぐらい静かだったし、肉や砂糖など物資も豊富でお腹いっぱい食べられた」と。筆者も、兄弟全員通っていた静岡大学付属小・中学校では地方公務員の子として肩身の狭い思いもしたが、ものすごく貧乏を感じたわけではない。

しかし、前述のように、戦前の日本における人の移動の範囲は、国家の活動範囲と強く結びついていて、いわゆる「外地」を含む海外に移動した人の8割以上が旧植民地ないし中国に在留していたことを思えば、引揚者の人生が国家の方針、この場合は戦争、に翻弄されたのは確かだろう。戦争になったから財産がなくなったのは当然のことだと思うのには疑問が残る昨今である。

安岡(2014)も、『集団化した引揚者たちが主張している理念で最も目を引くのは「戦争犠牲を均分化すべきだ」ということだ。これらの人々は引揚げるときに何も持たない人になってしまった。それと内地に暮らしている人々の生活格差をどう考えるか、彼らはそれを「戦争犠牲」ととらえ、「未帰還者の早期帰還」とか「生活保護の適用」「在外資産の補償の要求」などという形で出てきた』と述べている⁴⁵。画一郎も日本引揚賠償の件で、時の「ダグラスマッカーサー」へ抗議の手紙を出し彼のサイン入りの公文書の返事をもらったり、吉田総理大臣にも漢文の手紙を出して実情を訴えたようだが、父健と幸子は自分達ががんばっていくしかないと個人的なことで捉えているようだった。

祖父画一郎は、日本に帰ってきてアメリカや上海を懐かしがっていたことが、孫たちの記憶の中にある。上海は、中国とはいえ、国際都市でありヨーロッパの文化と生活様式を保てる上に、英語を使って貿易の仕事などが出来、排日抗争があったが自分自身がアメリカに居た時のように差別の対象になったわけではないので、実際は、上海の生活が一番居心地がよかったではなかろうか。しかも、息子の健が理想とは違う女性と結婚したとはいえ、家族がそばにいて、生活の心配をする必要がなかったからである。しかし、画一郎は真底アメリカが好きだったようだ。差別的な待遇を受けても、どうしてもアメリカ嫌いになれなかったと思う。

浜松は地方都市ではあるが田舎というほどではない。しかし、サンフランシスコ、上海に住んだ経験のある者にはその単一言語と単一文化が物足りなかったのではないかと考える。本論の題は「家族史の中の祖父が見つけた終の棲家―引揚者として上海から浜松へ」ということだが、浜松が終の棲家だったのは、画一郎にとっては不本意だったのかもしれない。それが、「孫たちよ！海外に雄飛せよ。」という画一郎の遺言になって表れたのかもしれない。

いずれにしろ、この鈴木一家3世代は、同じ屋根の下で8年間生活をともにした。隠居生

活で余生を送り、自分の夢を自省する祖父と、子どもを食べさせるのに精いっぱい自分達の夢など追う余裕のない両親と、自分たちの夢を定め、その夢に向かって進む子ども達であった。論叢の3部作の最後に、画一郎から英語を教わった二男が米・独に留学し、その二男の縁で末っ子の筆者がアメリカに留学できたことを祖父に報告したい。

最後に、安岡（2014）も「戦後日本を顧みるとき、対話や口承それ自体が欠けていた歴史、あるいは語る試みが挫折した歴史について、引揚者という人びとの生から、問い直すことをうながされているように思える⁴⁶。」と述べているように、鈴木一家の引揚げ体験という過去の事例を考えることで将来の若者に参考になる点があれば幸いであると考え。

謝辞

この章を書き上げるに当たり、工学院大学論叢編集委員会の委員の皆様に感謝の意を表したい。また、現在も健在な長男達徳（79歳）、二男善勝（77歳）、長女絹恵（75歳）、三男南海雄（73歳）、四男文徳（71歳）と各家族、ニューギニアで戦死した俊雄も命をつないでくれた大事な構成員として感謝したい。父母の28人目の曾孫が誕生したのも幸いである。

付記

本篇の1は、杉野俊子（2015）「アメリカから上海の日本人租界へ—家族史の中の祖父画一郎—」『工学院大学研究論叢第53-1号』1-17、の内容の要約と加筆、2は杉野俊子（2015）上海の日本租界に生きた引揚者—ある家族の体験から戦後を考える」39-57、『第二次世界大戦の遺産、アメリカ合衆国』杉田米行監修、大学教育出版、の中で、父親健の引用はと重複している部分がある。尚、以前の著作で画一郎の没年を1956年と記したが、正確には1957年である。ここに訂正とお詫びを記したい。

注

- 1 鈴木無絃 (1924)『驚きいつる母国の社会』(第二版)(二松堂書店, 1924)。オリジナルの旧漢字は常用漢字に直したが、言い回しはそのまま引用した。実際の本が国立国会図書館で見つかったのは2008年12月のことだった。
- 2 杉野俊子 (2012)「アメリカでJap (anise) として生きること—太平洋の向こう側に夢を求めた日本人男子のモノグラフから」『工学院大学研究論叢第49-2号』1-16。
- 3 鈴木健 (1972)『流れの中に』未発表著書。筆者の父親の鈴木健が1972年に文芸春秋社に投稿したが不採用になった。元原稿は手書きだったが、後に二男の善勝がワードで打ち込んだために、ページ数は不明である。以下、ページ数は不明のまま記載する。平成2年に父親が亡くなった時に編纂。筆者がじっくり読んだのは平成27年の5月である。
- 4 杉野俊子 (2015)「アメリカから上海の日本人租界へ—家族史の中の祖父画一郎—」『工学院大学研究論叢第53-1号』1-17。
- 5 島村恭則編 (2013)「序章 引揚者の戦後」『戦争が生み出す社会I—引揚者の戦後』、1-10、新曜社。
- 6 安岡健一 (2014)「引揚者と戦後日本社会」『同志社大学人文科学研究所、2014年12月1日、社会科学第44巻第3号、日本の「戦後史」と東アジア』3-16。
- 7 タカキ・ロナルド (1995)「太平洋を越えて—金のなる木を求めて」(条井輝訳) 富田虎男 (監修)『多文化社会アメリカの歴史: 別の鏡に映して』419-464、明石書店。
- 8 費 成康 (Fei Chengkang) (2006)「中国における各国租界の特色 (武井克真訳)『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』神奈川大学人文学研究所 (編者) 234-264、お茶の水書房。
- 9 藤田拓之 (2010)「「国際都市」上海における日本人居留民の位置—租界行政との関係を中心に—」『立命館言語文化研究 21 巻 4 号、2010 年 3 月』、121-134、124 頁。
- 10 西部均 (2006)「近代上海を地理学するための予備考察—在留日本人をめぐる研究展望と上海ガイドの紹介を中心に—」『近現代の上海・大阪の空間と社会、大阪市立大学都市文化研究センター、上海サブセンター編』44-65 頁。
- 11 陳 祖恩 (Chen Zuen) (2006)「西洋上海と日本人居留民社会 (谷川雄一郎訳)『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』神奈川大学人文学研究所 (編者) 201-230、お茶の水書房。
- 12 父親が1990年(平成2)、母親はその後の2011年(平成23)まで生きたので、上海の生活について聞く機会もあった。母親が90歳の時、60年ぶりで上海を訪れる機会にも恵まれた。浦島太郎のような状態だったのが、ガーデンブリッジを見た途端にあらゆる思い出が読みがってきた様が今でも目に浮かぶ。
- 13 Scotts Road (施高塔路、現在の山陰路) 日本人租界の魯迅公園の東側を南北に走る道路。
- 14 バンド (The Bund/ 外灘) は海岸通りを意味する。ガーデンブリッジ (Garden Bridge) は蘇州河にかかる橋で通称「白渡橋」ともいう。現在の橋は1907年完成の鉄骨橋。バンドの端にある Public Garden (黄浦公園) と対岸の (旧) プロードウェイマンション等を結ぶ。
- 15 陳、前掲 213 頁。
- 16 陳、前掲 211 頁。
- 17 木之内誠 (編著) (2007)『上海歴史ガイドマップ』第六刷、大修館書店 114 頁。
- 18 田中秀雄 (2014)『日本はいかにして中国との戦争に引きずり込まれたのか』草思社 68 頁。
- 19 田中秀雄、同上 209 頁。
- 20 大きなバラの茂みある庭で撮った写真の中の画一郎は、長男・二男・長女との普通の家族写真でも、コートを着て紳士風でいる。幸子が90歳になった時、60年ぶりに上海を訪れる機会に私も同行した。上海のこの家を見つける手がかりになったのはこのバラの茂みだった。
- 21 鈴木健、前掲。
- 22 山村陸夫 (2009)「上海における日本人居留民の引揚と留用」日本上海史研究会編「建国前後の上海」研文出版 180 頁。
- 23 佐藤 量 (2013)「戦後中国における日本人の引揚と遣送」『立命館言語文化研究 25 巻 1 号』2013 年 10 月、155-171、166 頁。
- 24 鈴木健、前掲。

- 25 鈴木健、前掲。
- 26 島村恭則編（2013）「序章 引揚者の戦後」『戦争が生み出す社会 II—引揚者の戦後』1-10、新曜社 8 頁。
- 27 稲葉寿郎（2013）「恩賜財団同胞援護会と土浦引揚寮」『戦争が生み出す社会 II—引揚者の戦後』pp. 175-207 新曜社 178 頁。
- 28 田中宏巳（2010）『復員・引揚の研究—奇跡の生還と更生への道』新人物往来社 176-7 頁。
- 29 安岡健一、前掲。
- 30 佐藤 量、前掲、155 頁。
- 31 佐藤 量、前掲、156-157 頁。
- 32 佐藤 量、前掲、158 頁。
- 33 佐藤 量、前掲、163 頁。
- 34 陳祖恩（2010）『上海に生きた日本人：幕末から敗戦まで』大修館書店。
- 35 安岡健一、前掲、5 頁。
- 36 引揚の歴史。舞鶴地方引揚援護局史 http://www.geocities.jp/k_saito_site/hikiage1.html 引用 2015.11.3。
- 37 高杉志緒（2011）『日本に引き揚げた人々』図書出版のぶ工房、9 頁。
- 38 安岡健一、前掲、6 頁。
- 39 少しでも皆の気持ちを和ませるためか、当時有名なオペラ歌手の三浦環^{みうらたまき}の弟子で隣保の「丸山さん」の奥さんが、船の中でオペラを独唱してくれたのを長兄が記憶している。
- 40 安岡健一、前掲、11 頁。
- 41 稲葉寿郎、前掲、184 頁。
- 42 島村恭則、前掲、47 頁。
- 43 三吉明（1959）「貧困階層としての引揚者の援護について」『明治学院論叢』第 52 卷 1 号。
- 44 安岡健一、前掲、11 頁。
- 45 安岡健一、前掲、8 頁。
- 46 安岡健一、前掲、14 頁。

（すぎの としこ 本学教授）

